

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：37111

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H06354・19K21437

研究課題名（和文）精神科病棟入院中の患者に対する日本型リカバリープログラムの構築に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic study on construction of Japanese recovery program for patients in psychiatric ward

研究代表者

黒髪 恵（Kurokami, Megumi）

福岡大学・医学部・講師

研究者番号：30535026

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、精神科病棟入院中の患者に対するリカバリー志向プログラムを実践し効果を明らかにすることを目的としプログラム前後の変化を調査した。

2018年7月から2020年3月までに51名の患者がプログラムに参加し40名から有効回答が得られた。評価には Recovery assessment scale(RAS)とローゼンバーグ自尊感情尺度およびWHOのQOL尺度を使用した。参加前平均値はRAS71.6から参加後78.5、自尊感情は21.9から24.1、QOLは2.75から2.96とすべて上昇し、有意差がみられた。入院中の患者はプログラム参加によって自己肯定感およびQOLが向上しリカバリーが促進された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の精神科医療は入院医療中心から地域生活中心への移行を目指しているが、地域生活は維持できずに再入院している傾向にある。地域生活中心の医療を展開するには、入院から地域生活へ移行する際の退院支援に課題がある。

私たちは日本の当事者の現状に基づいてリカバリー志向のプログラムの開発し、地域での実践を行ってきた。本プログラムは、地域においてリカバリーを促進する効果が得られた。今回入院患者に実践し効果が明らかになり、退院前リカバリー支援の一助になることが示唆された。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study was to implement a recovery-oriented program for patients admitted to a psychiatric ward and to verify its effectiveness. We developed and implemented a recovery-oriented program “IPPO” (Japanese word that means “one step”) for Japanese psychiatric patients living in the community. Then, we implemented IPPO for patients who were hospitalized and studied its effectiveness.

From July 2018 to March 2020, 51 patients participated in the program, and 40 valid answers were obtained. The Recovery Assessment Scale (RAS), Rosenberg Self-esteem Scale, and WHO QOL Scale were used for evaluation. The pre-participation mean values increased from RAS 71.6 to post-participation 78.5, self-esteem increased from 21.9 to 24.1, and QOL increased from 2.75 to 2.96, all showing a significant difference at the 1% level. It was found that in-patients improved their self-affirmation and QOL by participating in the program and promoting recovery.

研究分野：精神看護学

キーワード：リカバリー リカバリー志向プログラム「IPPO」 精神科病棟 退院支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

厚生労働省は、精神保健医療福祉施策において、2004年「入院医療中心から地域生活中心へ」改革を進めてきた。厚生労働省¹⁾によると精神科病床の平均在院日数は短縮化しており1998年496日から1998年には313日となっている。一方で再入院率は徐々に増加しており2014年14.7%が、2017年には15.1%となっている。入院期間が短縮化しているが、地域生活は維持できずに再入院している傾向にあることがわかる。入院期間の短縮化によって、患者は急性期を脱し回復期に移行する段階で退院となっている。再入院率の上昇、入院期間短縮化による退院時の健康の段階が変化している現状から、入院から地域生活へ移行する際の退院支援に課題があることが予測される。

「リカバリー」の概念は、1980年代に米国で生まれてきたが、その先駆者であるAnthonyは「リカバリーとは、精神疾患の破滅的影響を乗り越えて成長しながら、自分の人生における新たな意味と目的を見出すことである。…それは、たとえ病気による制約があっても、満足できる、希望に満ちた、やりがいのある人生を送ることである」と述べている²⁾。米国では、1960年代ケネディ教書によって精神医療は施設内から脱施設化へと移行した。脱施設化によって改善傾向を示す事例が注目され、1980年代に雑誌に投稿された当事者の手記によってリカバリーの考え方が広まっている。入院中にリカバリーの考え方について知ることは、退院後の地域生活維持に影響すると考えられる。疾患を持っていることを受け入れ、疾患による制約があっても自分らしい生活はできることを認識して退院することで、退院後に自分らしい生活を模索していくことにつながる。

現在日本に導入されているリカバリープログラムは、Illness Management and Recovery (IMR)³⁾⁴⁾やWellness Recovery Action Plan (WRAP)⁵⁾などのように、米国で考案され、和訳をして使用しているものがほとんどである。日本と米国では、リカバリーが生まれてきた文化的背景や精神医療の歴史にも相違がある。したがって、日本の当事者の現状に基づいて作成されたプログラムの開発が必要であると考え、IPPOというプログラムの開発し、地域での実践を行ってきた⁶⁾。地域生活をしている当事者と入院中の患者では健康度が違っており、急性期を脱したばかりの状況であり、リカバリーの段階では、初期の段階で治療や看護など周囲の支援によって自己の回復力(レジリエンス)を発揮しつつある状況である。同じ方法で実践したとしても、被害的にとらえてしまったり、疾患と向き合うことができない場合も生じる。リカバリープログラムを入院中に実践した結果について論じている文献はほとんどないのが現状である。

本研究では作成したリカバリープログラムを精神科病棟に入院中の患者を対象に実施し、患者の変化を調査してその効果を検証した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、リカバリーを促すために作成したプログラムを精神科病棟入院中の患者に実施し、QOLの変化、自己肯定感の変化、リカバリー得点の変化、患者自身が感じる変化から効果を検証することである。

3. 研究の方法

(1) 研究対象

対象施設は、A大学病院精神科病棟である。対象者の選択基準は1)精神科病棟に入院していること2)プログラムへの参加の意志があること3)主治医と相談の上参加することとした。リクルート方法は、精神科病棟の医療に関する責任者の許可を得て、入院患者のうちコミ

ユニティミーティングに参加している全員に口頭で説明した。プログラムへの参加を表明した患者に対し、研究の目的と方法を文書と口頭で説明し、同意書への署名によって研究参加同意とし、同意確認後に調査票を配布した。

(2) 介入方法

研究者らが日本で開発したリカバリー志向プログラム IPP0 を使用した。プログラムは、1 回 45 分、週 1 回の間隔で 4 回 1 クールで実施した。各回の内容は IPP0 に沿って、第 1 回目は「リカバリーとは何か」、第 2 回目は「やりたいことについて考えよう」、第 3 回目は「やりたいことについてアイデアをだしあおう」、第 4 回目「リマインダーづくり」というテーマで実施した。本プログラムは、専門職と疾患を持つ人という垣根をなくし、いろんな立場の人が同じテーマについてグループの中で考えるという特徴を持っている。1 クール 10 名程度とし、患者の希望人数によってスタッフ 3~4 名で実施した。

(3) データ収集方法

データ収集期間は 2018 年 7 月から 2020 年 3 月までであった。基礎資料として、参加者の年齢、性別、診断名、入院期間を収集した。プログラム前後に Recovery Assessment Scale (RAS)⁷⁾、QOL、ローゼンバーグの自己肯定感尺度の調査票^{8) 9)}を用いてデータを収集した。RAS、QOL、自己肯定感尺度の得点は基本統計量を算出した。実施前と後の比較は t 検定を用いて検証した。

(4) 倫理的配慮

研究対象者へ研究目的、研究方法、研究結果の公表および個人情報保護と参加者の権利について紙面と口頭で説明を行い同意書への署名をもって同意とした。本研究は、福岡大学医に関する倫理審査委員会の審査を受け、研究者所属機関の長の許可を経て実施した(認定番号 18-5-03)。

4. 研究成果

本研究の目的は、精神科病棟へ入院中の患者を対象にリカバリー志向プログラムを実践し、その効果を検証することである。日本の精神科医療は入院医療中心から地域生活中心への移行を目指しているが、地域生活は維持できずに再入院している傾向にある。地域生活中心の医療を展開するには、入院から地域生活へ移行する際の退院支援に課題がある。

私たちは日本の当事者の現状に基づいてリカバリー志向のプログラムの開発し、地域での実践を行ってきた。地域生活をしている当事者と入院中の患者では健康度が違う。そのためリカバリー志向のプログラムを同じ方法で実践したとしても、精神科病棟へ入院している患者は反応に違いが生じる可能性がある。患者はリカバリーの話を被害的にとらえたり、疾患と向き合うことができずに調子を悪くする場合も考えられる。そこで今回入院中の患者にリカバリー志向プログラム「IPP0」を実践しその効果を検証した。

2018 年 7 月から 2020 年 3 月までに 51 名の患者が研究に参加し、40 名から有効回答が得られた(有効回答率 78.4%)。有効回答が得られなかった 11 名のうち、体調不良のために最後まで参加できなかった人が 3 名、退院で中断した人が 4 名、4 名が解答ミスであった。

対象者は、男性 14 名、女性 26 名で、年齢は 18 歳から 79 歳、平均 44.7 歳であった。診断名は、統合失調症が 5 名、気分障害 23 名、適応障害 3 名、不安障害 3 名、そのほか不眠症や PTSD や人格障害などが 6 名であった。発達障害の合併がある人は 6 名であった。在院日数は 27 日~175 日で平均 79.5 日であった。

評価には Recovery assessment scale(RAS)とローゼンバーグ自尊感情尺度および WHO の QOL 尺度を使用した。参加前よりも RAS が低下した人は 6 名、自尊感情が低下した人は 6 名、QOL が低下した人は 8 名であった。平均値で比較すると RAS は 71.6 から参加後 78.5 ($p < 0.01$)、自尊感情は 21.9 から 24.1 ($p < 0.01$)、QOL は 2.75 から 2.96 ($p < 0.01$) とすべての尺度において上昇し、有意差がみられた(表 1)。

入院中の患者はリカバリー志向プログラム「IPP0」への参加によって自己肯定感および QOL が向上し、リカバリーが促進されることが分かった。

以上の結果から、入院中の患者に対するリハビリ支援として、リハビリ志向プログラム「IPPO」の活用は有効であることが示唆された。一方でRAS、自尊感情、QOLの低下した事例も存在し、方法や参加を促すタイミングなど課題もみられた。今後個別の調査を継続して行い、より効果的なプログラムの実践について検討していく必要がある。

表1. プログラム参加前後のRAS・自尊感情・QOLの平均値の変化

	n=40		
	プログラム参加前	プログラム終了後	有意差
RAS	71.6	78.5	**
自尊感情	21.9	24.1	**
QOL	2.75	2.96	**

注)

数値はリハビリ志向プログラム「IPPO」参加前後の平均値を示す

** : p<0.01

< 引用文献 >

- 1) <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/17/dl/09gaikyo29.pdf>
- 2) Anthony, W.A. (1993) , Recovery from Mental Illness: The Guiding Vision of the Mental Health Service System in the 1990s. *Psychosocial Rehabilitation Journal*, 16(4), 11-23
- 3) アメリカ連邦保健省薬物依存精神保健サービス部編, 日本精神障害者リハビリテーション学会監訳: IMR・疾患管理とリハビリ , 2009
- 4) アメリカ連邦保健省薬物依存精神保健サービス部編, 日本精神障害者リハビリテーション学会監訳: IMR・疾患管理とリハビリ , 2009
- 5) Copeland M E, 久野恵理訳: WRAP 元気回復行動プラン, Peach Press, USA., 2009
- 6) 黒髪恵, 坂本明子: 精神疾患を持つ人のリハビリを促すプログラムの作成と効果検証, *精神障害とリハビリテーション*, Vol.17 2, P193 -200, 2013
- 7) Chiba R, Miyamoto Y, Kawakami N : Reliability and validity of the Japanese version of the Recovery Assessment scale(RAS) for people with chronic mental illness: Scale Development, *International Journal of Nursing Studies*, 47; 314-322, 2010
- 8) 内田知宏, 上笠高志, Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて , 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第 58 集第 2 号, P257 - 266 , 2010
- 9) Mimura C & Griffiths P. , A Japanese version of the Rosenberg Self-esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *J Psychosomatic Res.*, 62 P589-594, 2007

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 黒髪恵、坂本明子、堤義和、西原玲
2. 発表標題 リカバリープログラム「IPPO」の実践
3. 学会等名 日本精神障害リハビリテーション学会第26回東京大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒髪恵、河野さつき、西原玲、松尾真裕子、原田康平、吉田哲也、池田静子
2. 発表標題 精神科病棟へ入院中の患者に対するリカバリープログラムの効果
3. 学会等名 第64回九州精神医療学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Megumi Kurokami, Akiko Sakamoto, Rei Nishihara, Shizuko Ikeda
2. 発表標題 Effectiveness of "IPPO" recovery program for psychiatric patients in community and hospital setting
3. 学会等名 The 26 th international conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒髪恵、坂本明子、西原玲、池田静子
2. 発表標題 精神科病棟におけるリカバリープログラム「IPPO」の実践
3. 学会等名 日本精神障害とリハビリテーション学会第27回大阪大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	西原 玲 (Nishihara Rei)		
研究協力者	池田 静子 (Ikeda Shizuko)		
研究協力者	坂本 明子 (Sakamoto Akiko)		
研究協力者	河野 さつき (Kawano Satsuki)		